

## 【資料紹介】

## 清客筆談

王 宝平

## 【解題】

表題の資料は明治十年と明治十一年に主に王治本と宮島誠一郎の間で行われた筆談記録である。王治本（一八三五～一九〇八）は、浙江省慈谿の出身で、字は維能、泰（漆）園を号とする。光緒三年（明治十年、一八七七）の来日から、同三十二年（明治三十二年、一九〇六）の帰国まで三十年間も日本に滞在し、幅広く日本の政治家や漢文学者と交誼を結び、活発な文化交流活動を行った民間文化人である。一方、米沢出身の宮島誠一郎（一八三八～一九一一）は、号は栗香または養浩堂。明治期に、修史局御用掛（一八七六）、修史館御用掛（一八七七）、兼宮内省御用掛（一八七九）、参事院議官補（二八八四）、宮内省華族局主事補（二八八六）、爵位局主事補（二八八八）、非職（一八九三）、貴族院議員（一八九六）などを歴任した政治家であり、漢詩人でもある。彼が残した膨大な日記、清国人との筆談記録、書簡などが明治前期の日中関係史の解明に役立つ第

一次史料となっている。

表題の資料は二冊で、共に宮島誠一郎が罫紙に清書した、神戸大学国際文化学図書館所蔵の写本である。

第一冊は三卷三十四丁（含表紙一丁と扉一丁）から成る。表紙に「清客筆談」と、扉に「卷ノ上／卷ノ中／清人王漆園筆話」と墨書されている。第三巻の表紙に「卷ノ下／清人王漆園筆話」と記されている。「卷ノ上」には、明治十年（一八七七）四月二十九日に王治本と宮島誠一郎が初対面で、東京芝山内光照院で筆談した内容が記録されている。巻末に「本年五月一日夜十一時清写閣筆／栗香小史」とあり、その日の筆談が行われた直後に、整理・清書を行ったことがわかる。「卷ノ中」と「卷ノ下」の整理年月については、明記されていない。「卷ノ中」は、同五月五日、王が宮島の自宅を訪問し、長松幹（一八三四～一九〇三）、重野安繹（一八二七～一九一〇）、川田剛（一八三〇～一八九六）、中村正直（一八三二～

一八九二」といった漢学者や、宮島の弟小森澤長政（一八四三～一九一七）と交流した記録である。芝山内光照院僧侶笹山忠造も出席したが、筆談には加わらなかった。

「巻ノ下」は、いきなり「王治本云丑時咄弟問諸貴邦友始知」と、理解し難い内容から始まり、欠文があるように思われるが、この筆談の終わりに明記されている「右數款訪王治本南傳馬町寓居筆談」から、宮島が南傳馬町に住む王の寓居を訪ねた際の談話の要点だと見て取れよう。但し、筆談の日には詳らかでない。この日、宮島は若い頃に作った漢詩の添削や「養浩堂詩集」と思われる詩集の序文の作成を王に依頼した。

次は三月十六日に宮島の留守中に訪ねてきた王が残した書簡である。詩集の序文を完成したという。

次回の面会は明治十一年三月二十二日である。宮島は火災で南傳馬町から築地入船町に移った王の住居を訪ね、公使何如璋に「養浩堂詩集」の序文を、副使張斯桂に詩集の評閲をそれぞれ書いてもらうよう、王に依頼した。安政元年（一八五四）から明治十二年（一八七九）の漢詩が収録された本詩集は、その後、楊守敬が書名を題し、何如璋、黃遵憲、沈文熒、黎庶昌が序文を寄せ、黃遵憲、何如璋、張斯桂、沈文熒、王韜などが評閲を書き、明治十五年（一八八二）に同題で刊行された。いかなる理由か、王治本の名がつゆ見当たらない。

翌三月二十三日、王は宮島の詩稿を刪定するため、彼の自

宅を訪問した。桜や西洋文化に対する日中認識の相違などを論じた。

四月十六日は王が留守であったため、宮島が秦哲明と筆談した。詩稿修正現状を把握するための来訪であろう。桜や科挙試験のことを言及し、王の文化人としての評価も話題に上っていた。

一週間後の四月二十二日に、入船町の王の住居でまた交流が行われた。王の従兄弟王琴仙（名は藩清）もいたので、王兄弟と会話を交わした。そして、宮島が二人を隅田川への花見に案内し、三人で漢詩の唱和を行った。

さて、第二冊は十六丁（含表紙一丁）で、表紙に「清客筆談」と、巻頭に「清客筆談明治十一年四月二日抄於青來閣中」と墨書されている。以下十点の内容から構成されている。

まず、王と宮島の談話である。場所は宮島の自宅らしいが、日には不明である。次に出る王の「自別後、匆經數月」という言葉から、明治十年の後半と推察できよう。宮島は「養浩堂詩集」二集の添削を王に依頼し、話が自然に作詩法や明治漢詩文壇への評価などに発展していった。二集とは「養浩堂詩二集」を指すと思われる、現在神戸大学図書館にその稿本が所蔵されている。表紙に「養浩堂秘藏／詠士拜題」と墨書され、「養浩堂詩二集」という題簽が天・地・人の三卷（冊）にそれぞれ貼付している。巻頭に光緒十七年（一八九二）九月付の李鴻章

の序、光緒十六年十二月付の黎庶昌の序、宮島の息子大八の師にあたる張裕釗の序がそれぞれ手書きで掲載されている。二集は「養浩堂詩集」を受け継ぎ、宮島の明治十三年（一八八〇）から明治二十三年（一八九〇）の漢詩が所収されている。しかし、「養浩堂詩集」と同様に、王治本の存在は確認できない。

次は明治十一年一月に行われた筆談である。この日、王は昨年六月に日清社で中国語の教授のために来日した従兄弟王琴仙を連れて、宮島に紹介した。曾根俊虎（一八四七～一九一〇）や小森澤長政も出席したが、筆談の記録には残っていない。

二月には四回ほどの筆談記録が存する。まず、南傳馬町伊東屋を訪ねた宮島は、詩集の序文の作成や外務卿寺島宗則（一八三二～一八九三）の指示で公使何如璋への引見を王に依頼した。具体的な日付は不詳。その次は二月十四日。宮島の自宅を訪問した王は、明日十五日に宮島を芝公園地月界院にある清国公使館へ案内すること、宮島の漢詩を一読して、副使張斯桂は非常に気に入ったことなどを宮島に告げる。宮島からは、師である山田夔堂（一八〇三～一八六一）の詩集の序文を王に依頼した。

翌二月十五日、宮島は王の紹介を通じて初めて公使何如璋、副使張斯桂を訪ねることができた。宮島と王との会話は王の住居で行われたらしい。日本に赴任したばかりの公使にとっても現地の知識人との交友活動を期待しており、王の従兄弟王惕齋

が通訳担当のために同行するように手配していたとも書かれている。この頃、王は中村敬宇（一八三二～一八九一）の同人社との契約満了により無職の状態となり、漢文学者小永井五八郎（一八二九～一八八八）らの善意で池之端に詩社を作る計画を東京政府に提出して、許可を待っているという。

四日後の二月十九日に、宮島はまた南傳馬町伊東屋を訪ねた。《養浩堂詩集》の序文を王に依頼し、張斯桂の宮島自宅の訪問について、相談した。筆談の終わりに甘肅に逃げ回った反乱軍のことに言及し、ロシアがそれを助力しているという噂を王に確かめた。漢詩文を楽しむ一方、それを利用して清国人に接近し、常に相手国の政治・軍事の情報をキャッチしようとする宮島の両面性が見え隠れした。

三月の筆談記録は三点ある。三月七日付の宮島宛の書簡で、翌日の午前中に来訪してほしいという。そして、翌日十時、宮島が王を訪問し、「養浩堂詩集」に対する張斯桂の評語の進展を尋ねた。また、この日の談話から、王が前日曾根俊虎の紹介で、初めて副島種臣に面会し、維新政府の要職を占めている大久保利通（一八三〇～一八七八）、松平春嶽（一八二八～一八九〇）、有馬道純（一八三七～一九〇三）などの要人、漢学の大御所である重野安繹も相次いで公使館に訪れることがわかる。清国の外交官や文化人の来日は、朝野を挙げて歓迎されていた様子が覗える。そして、最後に、三月九日付の書簡で、

王は「養浩堂詩集」の返し方について宮島に連絡している。

以上、神戸大学国際文化学図書館所蔵本に基づき、その書誌や内容を要約した。清国初代駐日公使何如璋一行は、明治十年十二月に来日し、明治十一年一月に東京芝の月界院に公使館を設置し、さらに同年十月に永田町二丁目十二番地の旧華族会館に移転した。表題の資料は、まさにその月界院公使館時代に当たり、草創期における人的ネットワークの構築や、明治十年代を生きる人々の相手国に対する認識などを伺う好個の材料となる。これらに関する考察は、紙幅の都合から、別稿に譲ることにしたい。

最後に、一点のみ指摘しなければならぬことがある。「清客筆談」の底本は、明治十年第一冊、明治十一年第二冊と整理されている。しかし、第一冊「巻ノ下」所載の六点（不明一点、三月三点、四月二点）については、「年」は無記載であるので、明治十年の筆談と見てよいか迷いがちである。その内容を仔細に読んでみると、六点のうち、(一)を除き、すべて清国公使館のことを触れていることに気づく。初代公使何如璋が清国外交官を引率して東京に到着したのは、明治十年十二月のことなので、「巻ノ下」の会話は、明治十一年三月と四月に展開されたと解釈できよう。したがって、現在の明治十年第一冊に整理されている「巻ノ下」は錯簡があり、明治十一年（一月～三月）第二冊の後に置くべきであろう。但し、今回は、底本の体

裁を残すことを基本とし、底本のまま翻印することにした。

## 【翻印】

凡例

一、以下の翻印の底本は、神戸大学国際文化学図書館所蔵の写本「宮島家文書写真撮影収録資料宮島誠一郎関係文書」のうち[2]清客筆談冊子△清人王漆園筆話▽（請求記号…210△088（MM/2））である。

一、翻印は現今中国で通行している古典整理法に基づくものとする。

- ・ 底本の改行・行詰め・字詰めには必ずしも従わなかった。
- ・ 異体字は現行中国の繁体字に改める。
- ・ 句読点は現行中国のものに統一する。
- ・ 必要と思われる見せ消ちのみを注釈に付した。
- 一、便宜上、各筆談の冒頭に(一)、(二)、(三)等を添えた。
- 一、細字双行の箇所は丸括弧に入れた。
- 一、斜線／は、改行をあらわす。
- 一、判読不能の箇所は□で、疑問と思われる箇所は、クエスチョンマーク「？」で表記した。
- 一、書き手の略称は底本のままであるが、文頭の記入に統一し、底本無記載の場合、補入して丸括弧で示した。

## 1. 清客筆談

清人王漆園筆話／卷ノ上／卷ノ中

明治十年四月二十九日，訪芝山內光照院笹山氏寓居，邂逅

清國寧波人王漆園，筆談移晷。

王：請台篆。

誠：姓宮島，名誠一郎。不厭陋寓，被枉玉趾，感謝！感謝！

王：突謁崇階，草率不罪。

誠：寧波金陵，相距幾里？

王：寧波距金陵二千餘里（日本一里，南京六里），輪船由上海約二日一夜可到。

王：前明南北兩省建都，今敝國帝居北京，而南京規模仍是都會，城堞森嚴，被毛賊竊居近十年。有被焚燒者，有轉行建造者，是偽王宮等，極作華麗，今皆改為官署。

誠：寧波戶數幾何？物產何？風俗如何？

王：寧波府轄五縣一廳：鄞縣、慈谿縣、奉化縣、鎮海縣、象山縣，一廳定海縣。

王：東鎮海，即出海口，為招寶山，稱蛟門，西慈谿，至紹興府餘姚縣界，南亦與餘姚連界，為鄞縣地北奉化與台州府連界，象山在奉化西北，定海乃懸海一州。計里方圍不下千里。戶口雖縣有大小，每縣大約三萬多，有魚、鹽、花茶之饒，人多士商，風俗純良。

誠：毛賊之難，寧波安穩否？

王：毛賊自壬戌秋犯寧，盤踞者幾十年，惟西洋租界安靜，焚戮

不少，後亦借用輪船攻進。自寧波敗賊，則毛賊亦多被戮，或見機潛逸。蓋寧波乃沿海地，俗稱袋底，至此亦無可他窺矣。

誠：毛賊之難，先生得能免否？

王：敝眷初避山鄉，累月後出申江。舍間屋宇無恙，初雜件多被糟蹋，往往有非毛賊而冒而竊取者。蓋毛賊之擾，有一賊而連捉十餘人，千餘人，皆畏之如虎，不敢相拒者，豈力不敵也，其威使然也。後輪船進江，炮聲一擊，捉人之賊轉而避入草莽中。在草莽中避者，轉去而捉賊。問其何前却而後勇，在人亦皆不自知也，在心之畏與不畏也。

王：近日薩毛風向如何？

誠：單于遠遁逃。

王：聞知近二日風向不好。

誠：不然，不然。

誠：聞敝邦之詩不適貴邦人之耳，辭句不精耶，音調不正耶。請教。

王：貴邦之詩佳者極多。如弟所識磬翁<sup>③</sup>、春濤<sup>④</sup>、拜石<sup>⑤</sup>、石埭諸君子，皆傑出一時。其他弟所未識者甚多。至或音韻失誤，亦學之未精耳。惟詞調祇有拜石君善之，而四六駢體，未聞其人也。意以貴國讀文句，有先後掉讀之故。

誠：古人詩之最適音節者為誰？

王：音節之雄壯，惟杜老為最。然古人詩到自然之句，亦間有不



拘音節者。

誠：以作近時之拙製，錄以乞電正。

明皇打毬詞

花萼樓頭仙樂催，大家此父打毬來。銀盤高爇千枝燭，嬪嬙如花春殿開。太平天子最重色，不似唐虞修文德，有人泣獻金鑑篇。魚蠹蛛絲塵空積，嗚吁三郎弄國如輕毬，一擲郎當蜀山頭，至竟興變關人事，金鑑只須照千秋。

王：深情感慨，有吊古傷今之意。

誠：此詩若不適音調，則請摘發以見教。

王：七古不拘音韻，在格律用意間，求其高妙。此首能寓規諫之意，故佳。

誠：古體之風格，請聞其詳。

王：古調唐詩多用排句，作流水對法，其氣渾厚，其意流轉，此格最高，後人作者多不解此。然擬古終要用數句，方覺端莊厚重，否則恐流散之弊。

王：偶得到鐵研一絕，錄以獻，勿笑為幸。笹山氏藏鐵硯，故有以詠。

莫云堅鐵硯難穿，何識吾心比鐵堅。頑鐵成金終有日，藝窗十載苦磨鑽。

誠：清新秀逸，不啻詠鐵硯，並及笹山氏之心事，何等筆力。

王：過譽不敢當。

王：昨夕對月，偶吟一絕。

風靜星稀月一輪，松陰缺處漏光明。（書窗外，古松數樹，

濃陰滿地）。倚欄不覺遲遲夜，萬籟蕭然鶴有聲。

誠：神韻悠然。

誠：吾邦陋湫，實甚得先生一來想始生光輝。不陋居之號，足以見大國中華之氣象。慚服，慚服！（王漆園號不陋居，故及。）

王：此譽焉敢。弟近又改號「吾妻過客」，如何？

王：《吾妻鏡》一書，先生有藏否，乞借一觀。

誠：敬諾。

誠：距東京十八里，有鎌倉將軍源賴朝，曾開霸府于此。當時大磯小磯有娼家，繁盛無比，有名妓阿虎，化為石，今猶存焉。花水橋在大磯驛，妓曾送遊客處。見于《吾妻鏡》，錄舊製以呈一粲。

霸氣銷沈山色遙，大磯平塚晚蕭蕭。美人千古化為石，風雨聲寒花水橋。

王：情景俱遠合，千古美人亦當會笑。

王：如先生之詩者，精於音韻，一唱三歎。

誠：聞先生近頃微恙，如何請自愛。

王：近日服栗園先生劑已將全愈。（栗園，淺田宗伯之號）

誠：恭賀，恭賀！

王：近日忌酒忌口，先為告罪。

誠：不強勸杯，適意可也。

王：先生射覆酒令善否？

王：問雷，白日依山盡。

王：做令，依必中吃一杯山字中，做令者引杯。

王：昨日途上苦風口，占二絕書以乞正。

春風如虎者番狂，收拾千紅萬紫粧。可恨惡來情太毒，拼將直筆草彈章。

一卷封書奏玉皇，愿求敕令護花鄉。從令柳綠花紅處，不許風姨再眷忙。

誠：佳謔卻是真惜花者。

誠：近閱《環海新報》，得「讀貸坐敷」、「楊弓店」之高作，先生早已通曉此等情景，何其神速也。如弟不及遠矣。

王：弟於耳得之，未入箇中，乃局外漢也。

誠：遁辭亦妙。

王：既詠其景，不得不極力形容。

誠：不踐實域，何以得此絕作，先生遁辭到此應窮。

王：絕倒。

誠：酒味色味同趣，而英才必解飲。今先生不解飲，先生之所解者，果銷金鍋裏之飲乎。

王：酒色相連，不喜酒者，不喜色，亦相連而絕也。然余不喜色，惟喜談色中之情耳。蓋所謂關雎樂而不淫，亦以其能得色中

之情，不失情中之正，否則是絕欲也。絕欲則釋氏教非乾坤交媾之正氣。

誠：先生果解情之人，曾曰：「無情無性，豈可為道學哉」，先得我心。錄書製乞正。

一朶雲鬢壓枕低，鳴爐火細綠煙迷。夜深春悵耿無寐，月在海棠花影西。

王：此景頗耐人尋思。

王：就君詩意加倍寫之，勿厭其褻，亦風流自樂之意。敬此原韻。

兩頰添紅頭半低，秋波一轉使人迷。此中真箇銷魂處，怕見窗前月落西。

誠：酒間一時之諧謔，先生勿闕念。雖然不好色者，弟輩之所不取也。好之之取捨，在溺與不溺。

王：此方的實名言：「好色猶可，溺色不可也」。

王：一派枉言，真謔浪笑傲之人，君乞勿罪。

誠：聞近日魯與土將開兵端，魯若得全勝，何等影響？生于亞細亞洲，請高誨。

王：夷情不測。

誠：此詩錄以乞和。

一枝蓮燭玉堂深，萬卷圖書寶庫森。野史幸蒙明主顧，叩登高館果何心。

王：知君操班馬筆，為一代信史。吟此詩賀。

王：敬步原韻。

董狐直筆寓情深，一字修成格律森。莫被西銘難下語，鴻裁仰合聖明心。

王…朱子云…吾為《西銘》下筆難。

王…西銘、名張載、宋道學先生、父張浚、為鄂岳王事、功罪參半。

王…今日貴邦戊戌之役及西郷等、或亦有難下筆者、故及之。

誠…今日辱臨、而不能慰先生羈旅之情、誠不堪慚愧。幸不咎其失禮、而來賜教誨、何喜如之。

王…滋擾多多、感甚謝甚。但既訂文字緣、無作塵俗語、乃得成至交、不堪感謝。

王…近與拜石、石埭諸君約、不拘形跡、暇則彼此相訪。否則郵便存問、各適其意、不愧知心。

誠…弟始執謁勞先生、實甚不堪愧悚。古人曰…傾蓋如故、幸恕。

王…弟甚願識荆、乞弗退棄、我也為幸多多。

誠…今日之會、興無盡也。五月五日下午一時掃塵榻待尊來、餘付再謁之時。

王…準如尊約。

本年五月一日夜十一時清寫閣筆。／栗香小史

(注)

(1) 笹山…「清客筆談」卷ノ中に現れた笹山忠造。芝山内光照院に住む。その他、未詳。

(2) 「明治十年四月二十九日、借芝山内光照院、邂逅招清國寧波人王漆園、筆談移晷」と見せ消ちされている。「邂逅

邂逅」の文意がわかりにくくなっているため、未採用。

(3) 磐翁…大槻磐溪（一八零一～一八七八）のこと。幕末・明治の漢学者、砲術家。

(4) 春濤…森魯直（一八一九～一八八九）のこと。字は希黃、號は春濤。幕末・明治の漢文学者。

(5) 拜石…山本拜石（一八三零～一九二二）のこと。幕末・明治の篆刻家、漢詩人。

(6) 石埭…永坂石埭（一八四五～一九二四）のこと。明治・大正期の画家、書家、医師。

(7) 陋湫…「湫陋」とすべきか。土地が低くて、せせこましい。

(8) 大磯小磯…大磯は神奈川県南部、中郡にある町。小磯は大磯町の地名。

(9) 栗園…浅田宗伯（一八一五～一八九四）のこと。名は直民、惟常。号は栗園。信濃の人。幕末・明治の漢方医。

(10) 張載（一〇二〇～一〇七七）…字は子厚。横渠先生と称す。北宋の儒者。

(11) 張浚（一〇九七～一一六四）…南宋初めの政治家。中原回復の主戦論者。



卷之中

明治十年五月五日，青來閣招清人王漆園，來會者：長松秋琴<sup>2</sup>、重野成齋<sup>3</sup>、川田甕江<sup>4</sup>、中村敬宇<sup>5</sup>、小森澤長政<sup>6</sup>、笹山忠造<sup>7</sup>。酒間談話，以筆代舌云。

王：今日雨天，辱來臨，每每失敬，請恕。

王：叻在辱交冒雨晉謁荷。

□：厚意殷殷，感甚。登府一訪，見華屋瑠几，猶林花流馥，堤草迭青，恍如武陵漁入桃源仙境。

長：賤名長松幹，號秋琴。

長：久聞盛名，始得披雲，何幸加之。

王：眉宇豐秀，知尊履清適。祝先生凌雲仙骨，器宇不凡。萍水相逢，幸何如之。初到貴邦，才學迂疎，言語不通，乞諸君子幸教乃荷。

長：尊論過當，赧赧，謝謝先生。尊貴屬何州？

王：小弟寧波府學增生。籍貫慈谿縣，向在杭州教授生徒。賤姓王，名治本，號黍園，近號不陋居主人，又號吾妻過客。性多疎狂，是措大陋習，乞勿罪。

長：寧波者，道光咸豐間，所用兵處。想先生今猶有馬上草檄之感。

長：慈谿者，明有敬宗陳氏，蓋是歟？

王：陳氏後裔繁盛，有名欽者，前科翰林，亦其裔也。中：賤名中村正直，號敬宇。

中：《日清新誌》中曾得大文章而讀之，既廣異聞，又怡心目，豈圖今日幸接芝眉，深慰素懷。但野性不諳貴國禮法，故言談起居之際，倘有不免唐突者，請勿咎敢祈。

王：弟才疎學陋，《環海報》中，皆喜怒笑罵，草率陋言，不足云。文蒙過譽，不覺顏厚。乞教正不棄乃幸。

長：李大臣才望俱高，門下亦稱多士，現今有為能文之士，何人為最？

王：敝國握權大臣，近時會侯捐館，首推左李二公。而左公克壯，老猶百政尚儉，李公勲績並著，尚華使氣，不滿人意。其他督撫，皆濟濟多才。現在主幼國疑，幸賴諸大臣和衷協濟，得安磐石。至兵政自匪擾後，演習綦嚴，非復昔日也。

(川)：小哥姓川田，名剛，別號甕江。

(重)：姓重野安繹，號成齋。

王：始接芝眉，幸甚過望。

川：久仰，久仰，得遇何幸也。

重：大國人文繁盛，碩學鉅儒，應不勝指教。然以先生精鑑，舉其一二。方今文詩鉅匠，聲名籍甚，當推誰氏敢請？

王：敝國以八股文取士，弄筆書生不足掛齒。如弟者，乃雕蟲末藝。就前輩言，則王漁洋、趙甌北、朱夔尊、尤西堂、施愚山、全謝山、袁子才諸名人。近日大臣則會侯古文亦名重一時。其餘草野奇才，屈不勝指，而戡亂之際，終推濟世之才。

王：陳氏後裔繁盛，有名欽者，前科翰林，亦其裔也。中：賤名中村正直，號敬宇。

重…曾侯學行，僕常景仰。侯之捐館，舍其榮哀錄。傳至敝邦，僕獲寓目，如其臨終遺令一則，尤足見真儒氣象。侯之遺著，有何書乞教。

王…《曾文正公文集》，君未見也。當從申江購奉，幸賜垂示伏請。

王…貴邦酒筵禮節，多未諳習，得罪。

王…貴邦詩多學高季迪先生。

重…敝邦五六十年前學晚唐，遂轉為青邱，遺響存于今。第近年

頗知學漁洋先生，未能至渾化，深以為愧。先生幸勿吝示教。

王…漁洋詩派，敝國亦多仿之。

重…漁洋詩固為千秋絕調，然《帶經堂集》中，文章有極佳者，

似不劣其詩，而世未深賞其文，豈為詩名掩乎。先生以為如何？

王…漁洋詩胎息宋人，無盛唐氣象，此亦敝國風氣使然。如子才

全以才行，歐北全以氣行，而施愚山較勝，其《蠶尾》等文集，文氣極醇厚，可稱詩文雙絕。

重…上海有毛梓麟，香港有王紫詮，僕獲其著書，讀之歎文才富

瞻，學識宏達。先生識二氏乎否？

王…聞其名，未睹其人。

重…寶山有蔣敦復氏，聞數年前其人已物故，遺文《嘯古堂集》，多慷慨激昂之作，先生識其人乎？

王…《嘯古堂集》亦曾搜閱一過。

重…姜西溟先生與先生同鄉，不知其子孫有顯者乎？

王…西溟先生晚年登第，未見大用，讀《湛園未定稿》，渾然道

學名言，亦宋儒之醇者。其書法之精，尤餘備也。

重…先生號漆園，豈恂蒙叟阮物之意乎？

王…敝國乳名從行次呼，弟行七，長輩呼阿七，猶昔日阿瞞、阿

戎、阿咸之稱。弟因友人相呼不便，遂號漆園，愧無蒙叟才，聊効鋤園終老之意也。

重…始領高意，多多謝謝！

王…弟初到貴邦，訪問風俗，敬仰人才薈萃，民俗醇良，可羨可

羨。惟過崇西教，未免失所宗主。鄙意治國一道，外修齊平

治，終流偏弊，故聖如尼山，誠萬世帝王師也。而貴邦於字，殊鮮敬意。

中…敝邦本不出如孔聖者，而博取于他國，故不免乎雜糅之弊。

中…敬惜字紙，意殊鮮，誠如高論。

長…雲水萬里，羈窗孤栖，或難慰情。然有汽船、有電信，天涯

比隣，非復昔日之比，定知家園，近報安寧。

王…鴻來燕往，旬日相通，不必詠「家書抵萬金」句也。矧貴邦

與敝國，地屬比隣，夙通交好，而人身面目，亦無穿胸長股之別。若西人，則未免鼻尖白眼，異狀也。

長…先生近日觀墨陀東台之花乎否？我邦專賞櫻花，如貴邦於海棠。未知貴邦亦有類于此花者歟？將有異名同種者歟？幸教。

王…敝國櫻花落後即結實，聞貴邦此花不結果，為異也。櫻桃味

最佳，敝鄉杭州最多。

長：我邦櫻花有結實者，有不結實者，但重瓣者多結實，要之，不結實者十中八九。

王：宮島先生示「花川渡近作即席和韻奉呈吟壇乞正」。

百五春歸景寂寥，名花着雨帶煙銷。黃鸝不識東風去，不斷飛飛啼柳條。

王：即事口占：

天街雨意定如何，為想殘花落處多。唯有君園春色好，林間蝶影舞婆娑。

小帝王黍園未定稿

王：讀愛敬詩，「紅虹」爭韻奪奇，均屬高唱，令人百讀不厭，知一名才全在君身也。敬敬服。

中：僕偶然得接先生風采，何幸如之。今後賜教誨，不堪至願。

王：願叨愛末紅虹客日步和。

中：今日五時後，小生有事，故不得不先諸客而歸家，幸休見怪。

王：得忝辱交，相共推心，不拘形迹也。弟之狂態，乞為海涵勿罪。即席間，拙作未免班門弄斧，貽笑多多。

長：詩貴聲調，而我邦人不通華音，故聲調多不諧者。今試擇敝邦古人之作二首，以呈先生執佳。

自愛孤根抱暗香，寧隨百卉競時粧。多年惡雨狂風裏，獨立寒雲冷石傍。（管茶山）

蓋代高流王給事，山中松竹鎖柴荆。可憐凝碧池頭句，一著輸他雷海清。（梁川星巖）

王：前作清高，後作蘊蓄，莫別妍媸。長：非問詩之佳否，問聲調之優劣耳。

王：前作優。

川：風土不同，知飲饌不適。君口若有所嗜，幸賜食單，他日僕將遺焉。

王：貴邦食物咸皆美味，敝邦僻在海疆，凡洋味無不相同，皆足供弟饜腹也。蒙垂問，感甚。

□：蕪絲何處產？

王：杭州向無蕪菜，是乾隆間，帝南巡至杭，為以名地未產名物，一夜間添生西子湖濱。今以為嘗在玉腕者，雞肉美也，在陶皿者，豚美也。先生擇食可也。

王：弟依孟氏言，舍魚而取熊掌。

重：今般駐劄敝邦欽差大臣尊名為何？

王：正使，廣東人，名一時忘卻。副使，張斯桂，號魯生，乃弟同鄉人。

重：欽差副使張斯桂氏來此，請因先生執謁。先生首肯乎否？王：弟願作曹邱，當偕敝國使者同訪。

川：草堂距此數里，頗有田野之趣，若被枉顧，幸甚。

王：敬當如命超訪。（小）：姓小森澤，名長政。

小：君清國第一等才子先生大人。先生風流灑脫，一豪俠士也，敬仰敬仰。暇時乞枉顧敝寓為

幸。

王…今日得叨盛席，蒙賜優渥，謝謝！告辭。

重…人車將至，請少留。

王…人車隨時有僱。

重…雖然主人之意屬欲然強請，少緩之。

王…弟亦願長者後，同請告辭。

(注)

(1) 青來閣…宮島誠一郎の書齋。

(2) 長松秋琴…長松幹（一八三四～一九〇三）のこと。字は

子固、秋琴を号とする。長州藩士、明治期の修史家。男爵、貴族院議員。

(3) 重野成齋…重野安繹（一八二七～一九一零）のこと。字

は子徳、成齋を号とする。

薩摩藩士。昌平黌に学ぶ。東京帝国大学文科大学教授。

歴史学者。

(4) 川田甕江…川田剛（一八三〇～一八九六）のこと。号は

甕江。幕末・明治期の歴史学者、《古事類苑》編纂總裁。

(5) 中村敬宇…中村正直（一八三二～一八九二）のこと。号

は敬宇。洋学者・教育家。東京大学教授、貴族院議員、同人舎創始人。

(6) 小森澤長政（一八四三～一九一七）…旧名、宮島琢蔵、

宮島誠一郎の弟。幕末米澤藩士。維新後、海軍法務官、海軍省法務部長。

(7) 「笹山忠造」の後に、「廣部精及我」の見せ消ちあり。

(8) 王紫詮…「王紫銓」が正しい。王韜の号。

(9) 餘…ママ。「余」と同様に第一人称を表する。

(10) 修齊平治…修齊治平のこと。修身、齊家、治国、平天下の略称。

(11) 愛敬詩…《愛敬余唱》を指す。大槻磐溪（愛古）編、中村敬宇校、東京…珊瑚閣明治九年（一八七六）刊行。大槻と中村の唱和詩集。そのうちの詠西洋古銭の詩（第十四、十五葉）は宮紅韻が用いられている。

2. 清客筆談

清客筆談（明治十一年四月二日抄於青來閣中）

(一)

王漆園云…委閱二集尊者，容拜讀畢奉呈。

栗香答…拙著二集，殊疏率不堪讀，幸被教正，不堪感謝。不日

趨高館受其賜。

漆園云…尊者二集，佳句極多，因弟近日爲友人屬編《伊蘇普譚》

一書，故未得靜觀尊作。

栗香云…僕詩才乏，學淺，每章錯雜，今得先生之筆削始生色。

漆園云…先生思超格老局法，渾成筆力，起處直入，得勢大妙。

栗香云：梅花書屋，點削最妙。北邙山二句，換韻殊覺整散頓挫。

漆園云：弟學七古五古，凡轉調，喜四句換，或二句換，不喜或長或短，青邱集中亦皆如此。

栗香云：寶氏不知何代人？

漆園云：寶氏五子皆貴顯，寶燕山，有義方，故五子名俱揚（此

《三字經》中句），唐時人。

栗香云：「文君當壚」結末二句，有何妨礙改作，乞教。

漆園曰：此等詩須稍用香奩體為好看。古中作排，語氣較厚，

「千古死不朽」下接「迄今」較合簡。

栗香問：若友之用蜀都等之語於句法，如何？

漆園云：句法亦好，少覺寬耳。若上聯如急氣，下來倒要用寬接

詩，無定法。

栗香問：近來諸子拜謁受教，不何何人詩適先生意乎？

漆園云：貴國詩人能者儘多，君實大妙。舍君而求僕相知中，惟

永阪周二、丹羽花南二君為最。填詞則有齋藤、拜石

君，鷺津毅堂亦能詩。君相熟否？

栗香曰：惟知丹羽花南而已。

栗香曰：近來吾邦之詩，大抵浮華纖弱，詩風大衰。僕性素疏

豪，唯詩以溫厚為旨，為然否？

漆園答：貴邦之人，喜作香奩。君乃詩之正派，香奩體一為之，

不足訓也。

漆園云：過日有堂弟王琴仙來東，亦敝國文人，弟當同來趨謁。

(二)

明治十一年一月，王漆園攜王琴仙而來，會者曾根俊虎、小森澤長政也。

王漆園曰：自別後，匆經數月，早思趨候，緣聞君賦皇華，勞於

王事，故疏音問，而榮旌宮旋，亦未知期，有失謁

賀，歉甚。今晨展華翰並示佳吟，不勝欣羨。承情招

敘，特偕舍弟同登崇階。舍弟自去年六月來貴邦，與

弟同為庠生，略通詩文，粗知書法並篆刻等。

王琴仙曰：僕抵貴國後，漆兄談及盛名，如雷貫耳。本擬早登先

生之堂，一瞻道範，奈俗務縈身，有志未達。今日趨

謁，得識尊顏，曷勝欣幸之至。

栗香答：僕始見琴仙秀才，容貌雅順，方知襟懷絕塵。自今屢被

枉顧，咱單屋欠禮待，是恕。從兄漆園仁人，既熟交

誼，文人之交，不必要謹恪，真率放懷可也。今夜霜寒

逼肌，宜飲且吟。

王琴仙曰：初謁芸宇，又叨佳釀，實深抱歉。僕一介書生，碌碌

無長，過蒙獎譽，益涉慚愧。尊府夏屋渠渠，更以優

禮待僕等，反出此謙言，先生正《易》所謂謙謙君子

也。

栗香問：君來敝國，為何事業？

琴仙曰：僕來貴邦，本為教授生徒，前在淺草日清社，近因社

滿，閑居無事。

漆園曰：「今夕八時，與友約過訪敝寓，弟不得久陪，請辭。容過

日再晤敝寓南傳馬町伊東屋。

栗香曰：「今夕請以十一時散歸。」

漆園云：「因有友約，恐愆期也。故失禮先出。」

(三)

二月，訪南傳馬町伊東屋寓王漆園晤談。

栗香云：「此一卷，戊辰以後紀行中之作，句粗思淺，幸見教。」

漆園曰：「尊者精思妙句，珠玉成行，誦餘得挹清芬。」

栗香曰：「余近編集蕪稿，先生爲余撰尊序，自今後徑二十日爲妙。」

漆園曰：「準如委命。」

栗香曰：「我外務卿寺島定當通僕姓名于貴邦欽差公使，近日欲謁

公使。不知先生能爲介紹否？」

漆園云：「十二日謁尊府，約十三日下午同往一見。」

栗香曰：「願懷詩稿至紫黃先生宜幹旋。」

漆園云：「請敝國公使一誦評亦可。」

栗香曰：「副使張之善詩文否？」

漆園云：「詩文皆能。近公務匆忙，無近作。」

(四)

二月十一日發，五時至，漆園頓首。

前約十二日午後超府，緣今昨雨雪霏霏，載塗泥滑，容俟晴

朗，再訂晤期。日前辱臨，多慢歉甚。委誦尊者，俟趨晤時

面繳。此布請刻安。

(五)

二月十四日，王漆園來話

王漆園曰：「昨辱駕臨，適往同人社爲解聘約事。失迎爲歉。今日

過敝國公使處，訂定明十五日午後三時往見。尊稿已

誦畢，刻攜往公使處，副使大人張魯翁喜得見之，留

存細閱，約明日往見後奉趙可也。」

栗香曰：「拙稿今在張副使之處否？」

漆園曰：「因張副使官餘最喜吟詠，見君詩不勝稱賞，囑留存朗

閱，故暫存之，明十五日取奉。請君明日十五日午後二

時光降敝寓中，陪同往芝公園地月界院。」

又曰：「今日尊稿中古詩祇二首，俱一氣渾成，大有作意。」

栗香云：「昨年所願之蕪稿，十五年前少時之作。今日所願之作，

十年來之作。弟逢國家多故，廢筆硯殆過十年，而深歎

文業敗類，公務之餘，爲彼小冊子，素不堪讀。」

栗香曰：「弟未能筆語，往往有誤謬之弊，先生幸勿咎。」

漆園云：「先生筆達詞舉，無不明解，何謙言也。」

栗香曰：「學淺才小，意之所欲，筆不能言，覺詞情之未盡，幸盡

蘊。」

漆園云：「意之所到，有口不能言，而筆能言之。文人之筆及其至

可洩造化，泣鬼神，繪山水之勝，吐翰墨乃光。今誦先

生吟篇，有情有景，有筆有書，溫厚之旨，憂喜之情，

觸感而發，咸成妙句。較去年得誦二卷，更上一層矣。」



知先生公退必以吟詠陶情，故所造直將迫李杜之後塵。

栗香曰：弟少年嗜詩，當時我鄉里有蠖堂山田翁，頗爲學優才，

尤有詩名。弟弱冠就蠖堂學詩，蓋始七年。雖然未及知

蘊奧之妙旨，而蠖堂稍棺，今日見先生，始得披蒙雲，

何多舉。

漆園云：君蓋夙慧，詩學與年而俱進也。至委作序，後日脫稿奉

呈。

栗香曰：弟慕先師之恩，近日將編集《蠖堂詩集》，願賜序。

漆園曰：乞示蠖堂先生行略。得如命委。

栗香曰：「林外村家無待問，寒燈一穗照機鳴」句中，刪定「無

待問」三字之意如何？

漆園曰：林外村家一穗寒，燈望而可知，不待問也。

栗香曰：「無弦琴得弦中趣，得意句從意外成」，兩「得」字重

複，改爲何字可？

漆園曰：或「蘊」或「領」，二字酌之。

栗香云：弟亦曾改爲「領」，今符合。

漆園曰：明日乞示蠖堂先生行事，可作序。

又曰：今日已晚，明日可早過寓，可以暢敘更妙，告辭。

栗香曰：若有清閒，則可卜夜爲兄設晚餐。亦應催人車且，今夜

月光好，請徐徐。

漆園曰：人車候着，不便久敘，容過日訂期卜夜飲如何？

(六)

二月十五日，訪漆園，遂抵公使館月界院，見何如璋、張斯桂，談話移時。

王漆園曰：昨日滋擾，謝謝！

栗香云：惡路掃駕，隨例薄待，慚愧！慚愧！

栗香曰：今日欲往見公使，因先生媒介訂交誼，不堪鳴謝！

漆園曰：在敝國公使初臨貴邦，欲得碩學能材，訪求掌故（弟囑

舍弟惕齊同往。惕齊可作通事）。

何如璋、張斯桂兩公使談話一卷，別備。

栗香曰：先生近況如何？

漆園曰：同人社聘約已解，現閒居未得其所，乞諸先生周旋焉。

同人社約解後，有友小永井君、永坂君等謀，聊請立社

於池之端茅町地方。至請金無定數，以周旋多寡不計，

蓋以筆耕爲市也。近日報東京府，俟許狀頒下可定也。

栗香云：祈先生早得樂境。

漆園曰：齊藤拜石善篆刻，工詩詞，長三洲先生之友，君知之

乎？

栗香云：未知拜石氏。

栗香云：知長三洲乎？

漆園云：晤長梅外，未晤三洲先生。

先生如與長三洲先生，善乞拜見之，以訂良緣。

栗香曰：諾。

## (七)

二月十九日，訪王漆園寓居南傳馬町伊東屋。

栗香曰：過日得見兩公使，誠是大兄之力也。晤言之際，弟恐失禮，宜代吾陳謝爲請。

漆園曰：君見敝國公使，公使深欣喜之。十七日，張公使偕弟答拜有馬積齋兄，並公使云：約日回拜尊府。

栗香曰：兩公使定應善詩文？

漆園曰：張公使詩文弟曾見過，何公使詩文未見。

栗香曰：此一卷弟十七歲幼學之作，無可誦者，先生願一閱幸甚。

漆園曰：詩情發於天籟，君天懷曠達，得句殊佳，略有率句，弟冒昧從事，以添蛇足，乞勿笑爲荷。蒙賜厚儀，實增愧赧，心領，謝謝！至偕伴進調，弟有何勞不敢拜領，乞情恕。

漆園曰：公使詩序，弟已代請，約日可取。君詩集何名？委弟作序，明日當即起稿。

栗香曰：弟詩卷題曰《養浩堂詩集》。

栗香曰：先生倘伴張公使來敝廬，以二十四五日來則大可。

漆園曰：今日進見，當約定日期。又公使館隨員沈梅翁同來。

但貴處乞備桌椅，席地不便，至用膳，亦乞別備。因貴國菜不善飲食，不必豐厚，略備可也。叩在辱交，故敢直告。

栗香曰：敝國飲食何物能適貴國人之口？

漆園曰：雞鴨豬肉偕可，魚則熟食，密柑大好。

栗香曰：張公使一人伴來否？

漆園曰：何公使弟進見一約，來不來再定。

栗香曰：先從張公使始可也，何公使他日再約可也。

漆園云：何大人弟勿相識，不便直率相邀，而亦必須以尊意相請，來否不定也。

栗香曰：髮匪之巨魁爲誰？

漆園曰：洪秀全。

栗香曰：毛賊之亂，經年數幾許？

漆園曰：經十三年。破壞省城十餘省，破府縣者不計其數，殺人不少千萬萬。與捻匪相連結，捻匪則教訓也。

現陝甘等處尚未全平，左爵國大人在此戡定，善後事未定。餘孽亦未殲盡也。

栗香曰：甘州之賊，長毛之遺孽乎？聞俄羅斯助賊勢，果真乎？

漆園曰：別有一股，而毛賊之餘黨定有投入者，俄羅斯助賊之言未聞之也。

## (八)

三月七日漆園來翰。

連日爲他人作嫁衣裳，冗繁无暇，未得趨訪爲恨。茲承遣化，聞訂會期明日午後欲伴敝公使往拜他友，乞午前九時十時枉臨敝廬一敘可也。

栗香仁兄大人文

愚弟王治本拜

(九)

三月八日午前十時、訪王漆園。

栗香曰…過日拜托之近稿、張公評定如何？

漆園曰…尊稿前送、張公知已閱定。初五日、張公過敝寓、極口稱妙。但老攜來、弟午後進公館當取歸、明九日送呈可也。

昨見副島先生、觀其英風奕奕、讀其近作、而卓卓然自許管樂、大有抱負也。

栗香曰…副島翁頗有憂國之氣象、而會到貴邦、初謁同治帝、結兩國歡心。先生諮尋、翁之喜可知也。昨日曾根生訪先生、乃同曾根訪副島否？

漆園云…賴曾根兄爲介引也。

栗香曰…今日先生過公使館、宜代余陳謝張大人並沈梅翁、弟不日訪兩公亦將謝。

漆園曰…敬諾。

漆園曰…張公使來此與弟偶談。前日因大久保君請宴、故張公五時歸公館。

栗香曰…明九日送賤仆貴寓願托草稿、乃以何時可期乎？

漆園曰…明日十時十一時爲期。

又曰…大久保公常來公館中。

今日午前松平春嶽君、有馬道純君約見公使、弟囑傷齋弟伴往。因昨約君來晤、故不往也。

栗香曰…春嶽公弟舊相識、道純君未知。

又曰…重野君約第一二日内見公使。

栗曰…曾於敝宅與先生相見、頃重野言…一二日謁公使、然後招公使其宅。

今日史館有事、告辭。

(十)

三月九日、王漆園來狀。

刻接尊翰領悉。所有尊稿、即着來手至芝公園地敝國公館一取。因昨張公使有事、未遑聞取、當託沈梅翁乘暇稟告、故向沈梅翁處取之無誤也。此覆

栗香仁兄大人文右

愚弟王治本頓首

(注)

(1) 「二月」の後に三字分の空白があり、日にちを補欠するために残して残しておいたと思われる。

(2) 「二三」三字分の空白があり、日にちを補欠するために残しておいたと思われる。

(3) 戊辰・明治元年、一八六八年に当たる。刊行された《養浩堂詩集》第五卷に、戊辰からの漢詩が所収されていることから、ここでは《養浩堂詩集》を指すであろう。

(4) 「二月十一日發」から「此布請刻安」までは、王治本が宮島誠一郎宛の書簡である。

- (5) 何如璋、張斯桂兩公使談話一卷、別備…これは筆談ではなく、宮島の注釈である。現在、何如璋・張斯桂との筆談記録の原本は早稲田大学図書館に所蔵されている。翻印は劉雨珍編校『清代首屆駐日公使館員筆談資料彙編』（天津人民出版社、二〇一〇年、四三六ページ）所収。
- (6) 小永井…小永井五八郎（一八二九～一八八八）のこと。号は君山、または小舟。幕末の下総佐倉（現、千葉縣佐倉市）藩士・幕臣、明治初期の教育者、漢学者。
- (7) 坂君…永坂石埭（一八四五～一九二四）のこと。名は周二、名古屋の人。明治・大正期の書畫家、医師。「読売新聞」の題字を揮毫。
- (8) 長三洲…長茨（一八三三～一八九五）のこと。字は世章、三洲は号。豊後（現、大分県）の人。維新後は文部大丞・文部省学務局長・東宮侍書などを歴任。漢詩・南画にもすぐれた。
- (9) 『養浩堂詩集』…五卷、宮島誠一郎著、明治十五年（一八八二）刊行、世堂藏版。安政元年（一八五四）～明治十二年（一八七九）の漢詩所収。楊守敬書名を揮毫、何如璋、黃遵憲、沈文熒、黎庶昌の序文、黃遵憲、何如璋、張斯桂、沈文熒、王韜の評語があり、王治本の序文・評語未見。
- (10) 「養浩堂詩二集」という題簽が天・地・人の三卷（冊）

- にそれぞれ貼付している。巻頭に光緒十七年（一八九二）九月付李鴻章の序、光緒十六年十二月付黎庶昌の序、宮島の息子大八の師張裕釗の序が掲載されている。二集は「養浩堂詩集」を受け継ぎ、宮島の明治十三年（一八八〇）から明治二十三年（一八九〇）の漢詩が所収されている。
- (11) 副島…副島種臣（一八二八～一九〇五）のこと。号は蒼海。佐賀藩出身。維新の際の功によって明治政府の参与・参議・外務卿。征韓論を唱えて下野。のち枢密院顧問官・内務大臣。豪快な書でも知られる。
- (12) 曾根…曾根俊虎（一八四七～一九一〇）のこと。明治期の海軍軍人。少尉。明治天皇の御前で清国事情を進講。
- (13) 松平慶永（一八二八～一八九〇）…幕末の福井藩主。号は春嶽。新政府の議定、内国事務総督、民部卿・大蔵卿を歴任。
- (14) 有馬道純（一八三七～一九〇三）…江戸時代末期・明治期の丸岡（福井県坂井郡の町）藩主、丸岡藩知事、子爵。

### 卷之下

#### (一)

- 王治本云…丑時呬、弟問諸貴邦友始知<sup>1</sup>。  
栗香 一云…貴邦無此事？  
王治本答…此風仿佛者卻有之、而名則不同。

栗香 云：「宜家」何故事？

漆園 答：《詩經》：宜尔室家。男女相約婚嫁也。

栗香 云：此卷詩，弟少年作，素無練磨之力，故為棄卻。今逢先生，大削蕪章生輝。

王治本答：君材氣瀟灑，出口成章，往往有佳句，非人所能學得，蓋得夫天籟潛易處。知不免有蛇足之慚。

栗香 曰：弟少年苦無友，中年苦無師，今得先生，並得師友，弟喜可知。敝邦文學不振，詩風亦衰，方今非無作家，以弟視之，工樣人造，頗不合余意。

王治本答：律句兼貴琢鍊，然亦必有天趣，方得動目。而古今全宜天致錯落，自然成韻，一氣鼓鑄，始稱合法。貴邦詩學作者，多喜香奩體，未完落小樣。前日副島氏云：賴氏之詩，未得詩旨，蓋嫌其少真血性也。

栗香 云：詩本貴溫柔敦厚，而言者無罪，聞者不怒，自三百篇，降而為漢魏，為六朝，為唐宋，應不失其旨矣。

今日本詩，纖弱如婦人女子，無君子立廟堂之氣象，余誠慚愧。

王治本答：誠哉是言也。弟之撰序，即本君此數言為主。

栗香 云：願改此流弊，詩風入諸於大雅之正。君助之。王治本答：君詩可謂正而葩，是以憂國經論，發為吟詠。晉人評詩，謂全是愛國忠君之念。李詩滿紙風月，杜實傑出于李。

栗香 曰：今日若有清閒，即會飲近樓，不知許否？

王治本答：因明日上海船開，尚有小事，不克留飲為歉。

又 問：家鄉有具慶兩存乎？妻君令兒如何？

王治本答：椿諼並謝。言之心傷，長兄亦去世，唯二家兄在，拙妻與豚兒無急。蒙垂問，謝謝！

又 問：令兒年齡幾許？

王治本答：小兒已十六歲，在敝鄉學經營。拙妻有風疾，不能行，是以倍切內顧憂。

栗香 云：近日同君會飲向島八百松，攜沈梅史來尤妙。

王治本答：既蒙見抬，請君卜日。

又 云：十八日，弟即閒暇，春風和蕩，願報之沈梅翁。雨則止。

王氏 答：或有與沈梅翁同來二三人，諒亦可。

王 治本：昨閱新聞紙，君家席上之談吟，皆刊入新聞。弟詩拙甚，實愧甚。

右數款訪王治本南傳馬町寓居筆談。

(二)

三月十六日，王治本來，余不在宅，為遺書。

前約數日內相訪，今午後超府，適值閣下他出，不晤為悵。

委撰尊稿序，草率揮管呈政，未知有當大雅意否？近日如蒙枉顧敝齋，乞即先一日擲郵報傳得守候，否則恐從友人別招，有勞尊駕空返也。草泐留奉。

栗香仁兄大人文右

愚弟王治本頓首

三月十六日

(三)

三月二十二日，訪築地入船町王漆園寓居。

栗香云：過日蒙枉顧，生憎不在舍所，願尊序蒙攜來，不堪拜謝。

王治本答：前日超府，適值公出不晤。後接手教，知蒙台閱拙作，草草恐不當尊意。

栗香云：頃有大火，市街驚遽，既而聞先生移宅於此。即於此處，可得刪正詩稿乎。

王治本答：十七夕祝融煽禍，借風熾而益狂。伊東屋主匆忙收拾，眾客鳥散。弟無奈即得移居此處。聞友人覓社屋於下谷，擬請官給狀得許狀，即可入社，故不復寓伊東屋也。此樓亦堪容膝，陳設筆硯，儘堪從事文墨，有委命可以評閱。

栗香云：先生若有清閒，則明二十三日午前，被訪敝舍，願可得評閱乎？

王治本答：蒙見招，如命超訪。

栗香云：午前八九時掃榻敬侍，請惠終日之力。

王氏答：約九十時到府。

栗香云：攜來之蕪稿，第十七歲之詩也。殊不免乳臭，伏乞紫

黃。

王氏答：當詳讀一過。

栗香云：近頃不訪，張公使大人近況如何？

王氏答：前日重野翁偕一二友同訪公使，君諒聞之。

栗香云：前日重野訪公使，公使不在館。而後重野再訪公使否？

王氏答：後未聞再訪。

栗香云：近日見公使欲請序余詩，先生為余代請否？

王氏答：當代求張公使。

栗香云：弟所著《養浩堂詩集》，欲乞張公使評閱。先生亦當得代請乎？

王氏答：過日可代懇張公使，諒無不允也。張公使無事閒暇，亦樂借文字以消遣耳。

(四)

三月二十三日，王漆園來為余刪詩稿。

栗香云：近日蒙來教，多謝！多謝！蕪章一卷，願費餘勇加紫黃伏乞。

王氏答：弟今日蒙招約，如期超府。昨日午後，因沈梅翁等數人招弟過公使館中，作長夜飲。

至六時始得一睡，始起回寓，故來遲也。

栗香云：盛宴景況，可想而羨。

王氏云：君處有《歐陽文忠全集》否？



栗香答…無之。唯有《八大家》而已。

王氏云…因有友欲弟注《歐蘇手簡》，《蘇集》弟有備，故問及《歐集》，借以一閱。

又云…近日清明時節，正桃花初放，柳葉纔新，無窮好景，而習習和風，吹人欲醉。

栗香云…敝邦花木與貴邦相同而異名者，或同名而異花者，他日把其花確定其名誠妙。

王氏答…名之不同亦有。且如櫻花，敝邦結實曰櫻桃，而貴邦櫻花不結實。至樹木一二年者，遷栽異地，不能復活，貴邦則隨時可遷種，其盤法亦大好，梅花老幹接枝大妙。

敝國不能有此。

栗香云…小金井距東京七八里，櫻花滿堤，一帶長川，流花樹間，花時望之，兩岸堆白，如數里之香雪，誠壯觀也。

敝國櫻花之多，到此第一。先生同游如何？

王氏云…小金井即向島乎？

栗香云…與向島異，西距東京七八里。此花兩百年前，德川三代將軍家光之所栽古木，大抵十圍之物。

王氏云…勝景不可不一探。

栗香云…凡國之爲國，年代愈久，則國風愈趨愈下。敝邦比貴邦

建國以來年代未久，而經亂蒙難亦未多，蓋海中孤島，倖存古樸也。目今西洋氣風遍及東洋，先之樸實者如何可存之乎。余察貴邦內地，周漢以來，治輩無數，加之道光以來，屢罹外難，宜哉，人心世俗，失古樸之質。

王氏答…尊論極是。非曠觀上下古今者不曉。

又云…敝國自西夷入寇以來，人心大變，藐視王章，以致髮匪、捻匪相繼作亂，其禍實啓自西夷。而西夷絕無主見，得匪金即助匪，得官金即助官，一以利自圖。弟視貴邦卻無患，而所以待西夷較敝邦尤重。

栗香云…敝國待西洋比貴邦漸重，請說其詳。

嘉永癸丑（抵貴邦咸豐四年<sup>4</sup>），北米合衆國使節航火輪船始來，敝國江戶當時幕府（德川政府）視貴邦道光之變，頗患之。貴邦最大之國，猶且一戰，失海門之要地，我有大所鑑矣。當時以爲萬國交通，宇內一般之形勢，和親交易不可不許。於是，攘夷過激之徒，蜂起充

滿于天下。關西諸侯，非斥幕府，頻推京師。天皇亦大怒，頻下攘夷之詔，使沿海諸侯，擊來航之洋艦。當是時，天子之詔與幕府之令相悖戾，海內騷然，開鎖兩

論，軌轍者數年，遂爲明治維新之王政。抑武門專治執政權七百年，於是幕府初返上政權於王家。而王家承幕

府之後，內察宇內大勢<sup>5</sup>，外交通萬國。先之所謂攘夷家

者，或暗殺大臣，或斬傷洋人，種種變難隨起。朝廷始

苦其處置，嚴制暴徒，厚待西洋，所以不失土地，亦所以厚待西洋。要之眇眇一個東洋孤島，未足抗彼西洋連邦之強大。貴邦五分地毯保其一，徒自尊大，屢受外辱。此際若虛心結交，與貴邦相聯合，共為東洋二強國，以當西洋之凌壓，始可伸愁眉。

王氏答：敝國之不能勝西夷者，非寡與衆、大與小之不敵也，在於敝國承平日久，人不知兵，故聞擊鼓而心驚，見旌旗而膽落，且當事多受西夷之賂，自相為賊耳。然現在敝國人與西夷來往者，無非圖其利耳，且無一人心服西夷者。

## (五)

四月十六日

栗香云：過日所乞漆園兄之詩稿，不知能刪正否？

哲明答：尊作漆園兄每日在家來，批好與否，僕不知也。

栗香云：漆園兄詩才與文才並當。

哲明答：漆園兄詩文貴邦人未識合否。現下貴邦人詩文序交他改不少，兼每日有友請飲。今日與敝國星使及大河內等遊

向島櫻花。

栗香云：櫻花與貴邦櫻花同否？

哲明答：敝國有菓，貴邦無菓，不同也。

栗香云：貴邦櫻樹有如敝國大樹乎？

哲明答：此樹在於紹興府，僕卻在敝國未見。大約相仿，無上下

分也。

栗香云：想敝國櫻花，東方一種名花。

哲明云：敝店有《飛鴻堂印譜》，君欲觀否？別店有所存者，只有四集，唯敝店有五集。然價百二十圓也。又有《通鑿輯覽》，係敝國御批，四十六帙，價二十八圓。

姓秦（チエン），名哲（チエ）明（ミン），浙江寧波府慈谿縣人。

宮（コン）島（タア）誠（チエ）一（キ）郎（ルロウ），清音如上。宮（米野）島（希毛）誠（奢生）一（壹氣）郎（羅），和音譯字如上。

漆（チイ）園（イン）先（シイ）生（シエン），園圓遠猿袁皆同，唯因平仄語音分之。

詩聲與唱聲不同，詩吟樂器相和，用絲管笙笛。

哲明云：向島之花，近日盛放，遊者大約不少。

栗香云：余一昨日（十四日）遊向島看花有句：香雲一白茫茫際，人在花中不識花。

栗香云：請聞及第之法。

哲明答：先始於鄉試，一萬餘千人考試，得中九十四名。

秀才、增廣生、廩膳生、舉人、進士、翰林。

學校試驗得及第順如此。浙江一省十一府七十二縣，午酉子卯為考試之年，自午至酉，其間兩年。明年巳卯鄉

試一萬餘千人。

古人云：翰苑之才，卻有不同。然敝邦爲翰林，多半爲字佳。

漆園兄之才與翰林彷彿，然運不抵，他今爲增廣生。欽差大臣何如璋，在敝國爲翰林編集官兼侍讀，封三品，及拜欽差，進二品官。一月得金千二百圓，張斯桂三品官，一月得金八百圓。

（栗香云）：昨閱上海新聞，左宗棠封二等侯爵銜，以賞勝戰功。

（六）

四月二十二日，訪築地入船町漆園寓居，王琴仙在舍，筆談。

栗香云：昨日漆園兄欲訪余，余有公事，故以郵書報知，不知達否？

王琴仙答：尊書昨已接到，知閣下有貴幹，未能敘談，所以不赴尊府也。

栗香云：拜願詩卷，僕少年之作，思粗句雜，兄等必大笑。

王琴仙答：先生詩才不讓李杜，雖少年學作中，句法雄健處，足以壓倒一軍。

栗香云：過譽，不敢當。但浙東有知人願傳余詩稿。他日將刊自著詩稿。

栗香云：漆園兄與先生同族乎？（栗子云：秀才家在何邊？琴仙答：浙江寧波府慈谿縣）

琴仙答：漆兄係同族兄弟。他家與弟相近不過一矢之路，同姓人皆聚居一處。

我鄉慈谿縣，唐宋時本名句章，元末改爲慈谿。有董孝子，日日在谿中擔水，以供老母，故改爲慈溪。

後西人擾慈，改「溪」爲「谿」。

栗香云：兄等孝思，所以勝人。

栗香云：試考文章，大抵限四書乎？

琴仙答：間試五經。

栗香云：大兄曾在貴邦舉秀才，秀才次增廣乎？

琴仙答：未入鬻者爲童生，既入鬻爲秀才，秀才再試，能列優等，則補以增生。

栗香云：願聞及第階目。

琴仙答：秀才考取則爲舉人（在省中巡撫所考，天子別放欽差展閱文字），舉人會試則爲進士（在京中試），進士殿試則爲翰林（在皇帝殿上試）。翰林有三等，第一等一名即爲狀元，二名則爲榜眼，三名則爲探花。第二等一名則爲傳臚，其餘俱爲翰林也。考試時題目皆在四書中，在欽差自擇。

殿試時皇帝頒俗。

搜檢官查出要定罪。

栗香云：「題鏡」何義？

琴仙云：一題都有解說，謂題鏡者。言其解釋明亮，如對鏡然。

敝省浙江文人最多，舉中國而言，三江（江蘇、浙江、江南）爲文人淵藪，其餘十三省亦不及三江之盛，所以

每科進士三百餘人，而三江人居其大半。

栗香云…漆園學問應入進士翰林者？

琴仙答…凡考試一道，一在文，一在運。徒有好文字，而不能入翰林者。又往往有入翰林者，文字亦未必佳，此不可定論也。

栗香云…然。不論國之東西，皆運也。

琴仙云…公使館中，能文者皆知先生文名，亦時有弟處往來，見

先生詩大爲擊節稱賞。

王漆園云…昨日接尊翰，故不果訪。但桂閣君仰慕閣下，殷殷於

心，乞定一日當約同來謁。

栗香答…過日訪何公使，邂逅大河內氏。

漆園云…昨日遊洲崎觀潮，遇雨而歸，惜爲雨破興。

琴仙云…昨日避雨於萬千樓，陋作七絕。

避雨忽忽登海樓，寬衣脫帽且勾留。天公不管遊人恨，

幸有吟毫消客愁。

栗香云…兩兄遊向島幾回？

琴仙云…二次。

栗香云…兩兄今日與僕遊步乎？

兩生云…如貴命。

栗香云…兄等欲遊何地？

漆園云…貴邦名勝區弟所素昧，祈先生擇之可也。

栗香云…僕今日不擇何地，兄等必有所擇。兄等已遊向島，又遊

洲崎，大抵勝地看了。

漆園云…隨君所至。

栗香云…然則又又遊向島乎？議已交，請束裝出門。

漆園有詩

再番探勝到橫塘，飛落紛櫻默羽觴。連日看花花也笑，將詩  
換酒大顛狂。

應懷春事奏彈章，最惡封姨妬豔妝。乞借濃陰長愛護，拼將

日日醉花鄉。

琴仙和韻

墨江髻髯似錢塘，一度看花醉一觴。花事易殘人盡怨，不知

花亦怨風狂。

栗香和韻

開遍櫻花十里塘，勝遊到處俶呼觴。此間最愛芳菲好，粉蝶

隨人一樣狂。

漆園用前韻

畫欄曲折傍池塘，團坐花陰醉一觴。笑我前生是杜牧，也將

詩酒赴情狂。

栗香又和

櫻花爛漫映池塘，相對春風把酒觴。憐殺放翁西蜀任，一生

唯物海棠狂。

栗香賦一絕示兩生

筆談相敘喜無涯，四海今欣共一家。好有春風吹客到，浙江

人賞墨江花。

琴仙和

半生詩酒即生涯，漫藉吟毫稱作家。連袂看花花事了，墨江花勝浙江花。

漆園又和

未能花下卜鄰家，三度探花興倍賒。詩酒流連情亦醉，歸途慣趁夕陽斜。

右飲梅兒墳畔八百松樓唱酬

栗香云…「花近高老傷客心」，又「花映垂楊漢水清」等花指何花？

琴仙云…二句大約桃花櫻花之類，此意係弟臆度耳，非確準也。

栗香云…「感時花濺淚」，是花桃或梅花，請聞其談。

琴仙云…古人觴物起興，有所見必有所感。梅是隱逸之物，桃乃

艷物，故花濺淚之意。但未知尊意如何。

栗香曰…此亭櫻花色黃又淡紅，墨堤中之最上品者。君仔細觀花

光，受夕陽而豐豔濃妝，其景異于他之花樹。一酌一

詠，以莫付漫觀。

兩生曰…洵然。

栗香云…吾儂傍無筆硯，猶魚離水。

又曰…此亭不唯花時好，夏時宜納涼，訂再遊妙也。

(注)

(1) 底本はここから始まり、欠文があると思われる。

(2) 生憎…漢語の意味は「最恨」「偏恨」。ここでは日本語での特別な意味。それをしようとするのに、都合が悪い状態であること。

(3) 之…「学」の見せ消ち。

(4) 嘉永癸丑…咸豊三年ではなく、咸豊四年に該当。

(5) 内察宇内大勢…「内親臨四海」の見せ消ち。

(6) (一) 内は日本語と清国語の発音の表記で、底本では漢字の右に振ってあった。

(7) 底本では「何如障」と誤った。

(8) 洲崎…東京都江東区木場の東隣一帯の通称。江戸時代にできた埋立地。洲崎弁財天社(洲崎神社)がある。明治二十一年(一八八八)根津の妓楼を移し、洲崎遊郭とい

た。

(9) 八百松樓…東京隅田川にある料亭。

謝辞 本稿執筆にあたり、元四天王寺大学教授、現浙江工商大学教授呂順長氏、武庫川女子大学柴田清継名誉教授にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

